相馬中村城と城下町に関する一考察

福島県立相馬高等学校　郷土部

１．相馬氏と相馬中村城の歴史

中村城は江戸時代を通じて相馬氏の居城であった。伝承によれば、中村城の始まりは延暦２０（８０１）年に坂上田村麻呂が蝦夷地との戦いの際、西館（中村城の西部）に菅原敬実が天神を祀り、館を構えたと伝わっている。一方、中村城を拠点とした相馬氏の祖先は千葉師常で、１１８９年の奥州合戦で戦功を立てたことから行方郡（現南相馬市）を与えられた。１３２３年、相馬重胤が現南相馬市太田に移住して勢力を定着させていく。戦国時代に入り１５４３年に宇多郡（現相馬市）の黒木氏、中村氏を滅ぼした。中村氏の拠点であった中村城には相馬氏の城代がおかれ、南方の小高城を本拠として現福島県浜通りの北半を支配した。そして、伊達氏との熾烈な抗争が繰り広げられ南奥は群雄割拠の状態となる。豊臣政権下では安定した治世を行った。この間、居城は小高城から村上城、牛越城、小高城と移転を繰り返した。慶長５（１６００）年、関ケ原の戦いで中立の立場をとったのを徳川家康に咎められ領地を没収された。慶長７（１６０２）年に必死の弁明が認められて旧領を安堵されて相馬中村６万石の大名として小高城に復帰した。慶長１６（１６１１）年７月２日から相馬利胤の命で中村城移転の普請工事が開始、その年の１２月２日に中村城に移転した。以後、江戸時代一度も国替えがなく「相馬の殿様」として中村城で明治を迎えた。

２．中村城の城郭構造について

【中村城】

【①本丸】

【②東二の丸】

【③西二の丸跡】

【④南二の丸（長友）】

【⑤外大手一の門】

中村城の規模は、本丸が「東西六十五間、南北六十二間、面積約二千五百（東西約６００メートル、南北約６５０メートル、面積２３ヘクタール）」でほぼ円形の形状。東、西、南、北に二の丸、さらに東、西、北に三の丸を配置した。鈴木啓氏の研究によれば「丘陵上の中館・中城・西館及び堀切・三の郭・岩崎塁は、自然地形に沿った曲線の塁濠線で囲われた中世城館で、これを包む東三の丸・中堀・南二の丸・泣面堀・土橋・円蔵郭、直線・直角の塁濠線で構成される近世城郭である」としている。１６世紀前半までの中村城は、中城（本丸）を中心におき、東に中館（東二の丸）、西に西館（西二の丸）を配した連郭式の城郭で、特に東北地方に顕著な中世特有の土造りの城であった。１６世紀後半、小高城から移転することを決定した際に重厚な備え（西三の丸、岩崎塁、蓮池など）を加えた連郭式の城郭に改修した。岩崎塁は北三の丸の一角にあり、北に出張った配置は明らかに伊達氏への備えを意識している。また、中村城の南を流れる宇多川は、時代により何回かの付け替え工事が行われ、河道が変更されてきた。慶長１６年時点でも河道を大幅に南に移して城地を拡張、堀としての機能を高めたことが郷土部員の実見で確認されている。このように、土造りの城を本丸などに部分的に石垣・土塁を付加した大幅な城郭・城地の改修・整備を行うことで、近世相馬氏の城としての姿を整えたのである。

【本丸鉢巻石垣】

【搦手橋（黒橋）と横穴墓】

【宇多川取水調節口】

３，西山丘陵と古墳時代の相馬について

相馬市の地形の特徴は、阿武隈山地から東に延びてきた丘陵が何筋かあり西高東低の地形を形成し、河川は東流して松川浦に到る。古墳時代にはこの丘陵に古墳が集中して営まれた。中村城が立地する西山丘陵、南の宇多川対岸には高松丘陵がある。これらの古墳群にはヤマト政権との関連を示唆する貴重な遺物が出土しており、上毛野氏とのつながりが指摘されている。西山丘陵の横穴墓群は盗掘が激しく遺物がほぼない状況であった。しかし、現相馬市の中心に位置し支配者層の聖域的な場所であり日の当たる南向きに開口した横穴墓群は時期が不分明ながら相馬の支配者が眠る場所として最適な地であったと推測する。後世になり古墳の被葬者の記憶が失われても、古墳やその丘陵が、聖なる場所として認識されていた可能性が考えられる。

【中村城と古墳群】

①中村城本丸横穴墓群（古墳時代後期？）
②高松古墳群（６～７世紀）
　高松一号墳から金銅製歩揺付雲珠などが出土。
③福迫横穴墓群（７世紀）
　双龍文環頭大刀柄頭などが出土。

【本丸横穴墓】

【高松１号墳】

４．中村城と城下町の特徴―「聖なる空間」との共生

「馬陵城又、中村城といふ。古は夫舘と云へり。此城地、往古より天神の祠あり。山は甚だ高からずと雖も、平地に突兀として、松杜蓊鬱、自ら城地の形あり。人名づけて天神林と云ふ」（『奥相志）） と記す。時系列では「横穴墓（古墳時代）→天神祠（平安時代前後）→夫館（平安時代）→中村城（中世～近世」となる。このことは、信仰の対象としての「聖なる場所」が時代を超えて連綿と息づいてきたと考える。中村城に関して具体的には「軍事と信仰の両立」である。城は、信仰の対象としての聖なる空間を取り込み、神仏に守護された城郭、城下町といった精神性を具現化したもので、戦乱の世であったからこそ信仰に依存したのである。江戸時代の安定した社会になってもこのことに変わりがない。この点で郷土部が注目したのは、城の西方にある「天水（あすい）」という丘である。ここには寺院、天水稲荷、藩主一族の「便殿」などが時期ごとに設けられ、丘頂部は平坦になっている。削平前は円錐形の形をしていたものと推測され、「神南備山」的存在であった可能性がある。城の西方は「西山」で、阿武隈山地から延びる尾根が連なり宇多川と共に城下町への水の重要な供給源である。江戸時代を通じ溜池が数多くつくられ生活用水・農業用水に利用され、なおかつ洪水対策も兼ねていた。以下は郷土部の現地調査からの城下町づくりの仮説である。天水は西山から供給される「天からの水」で、これは西方極楽浄土のイメージではないか。さらに**城の鬼門に当たる北東には牛頭天王祠（現小泉八坂神社）**があり城の守護を担わせ、**天水は裏鬼門（南西）に位置する**。天水からさらに西南西には熊野神社（戦国時代の城館）、涼ヶ丘八幡神社が鎮座する。中村城と城下町づくりの根幹には領国支配の安定を軍事面・生活面だけでなく神仏の加護によって信仰上からも得ようとしたことがうかがえる。古墳時代からの聖地は、神仏による新たな信仰に変化し、領国支配の一端を担うことになったと結論する。

１６１１年	慶長奥州大地震
２０１１年	東日本大震災（Ｍ９）
２０２１年	福島県沖地震（M7.3）
２０２２年	福島県沖地震（M7.4）

【相馬関連大地震】

まとめ

１６１１年「相馬領ノ溺死者七百人」の津波被害から４００年後、東日本大震災。そして、さらに１０年後に２度にわたる大地震で多くの犠牲と被害を受けた。本校の被害も甚大であった。しかし、伝統行事「相馬野馬追い」や各神社の祭礼の復活など地域の復興が少しずつ進んでいる。私たちは、この調査によって先人の平安への願いを噛みしめ、労苦を感じとることができた。復興に向けた明日への一歩としたい。